

Title	ルターを引き継いで：一七・一八世紀プロテスタントたちの連帯運動
Sub Title	Promoting the reformation in the late seventeenth and eighteenth centuries
Author	西川, 杉子(Nishikawa, Sugiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.1 (2018. 12) ,p.109(109)- 131(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2017年度三田史学会大会シンポジウム報告： シンポジウム「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義：五百周年に寄せて」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20181200-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルターを引き継いで

——一七・一八世紀プロテスタントたちの連帯運動——

西川 杉子

ラテン・キリスト教共同体の分裂

マルティン・ルターの宗教改革は、一六世紀ドイツ地域の出来事として限定的に捉えられがちである。しかしその衝撃がヨーロッパ全域に及び、さらに一六世紀をこえて続いた側面はもつと注目されるべきだろう。

宗教改革は、まず何よりラテン・キリスト教共同体(Christendom)としてのヨーロッパを、ローマ・カトリック教会と、ルターの教会批判の賛同者、すなわちプロテスタント諸派に分裂させた。これは、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝を頂点とする、中世から続いてきた聖俗両界における秩序の崩壊を意味する。その衝撃は汎ヨーロッパ的であり、プロテスタント勢力はローマ・カトリ

ックを反キリストの支配する邪教¹⁾法王教とみなすようになる一方、ローマ・カトリック教会はプロテスタントを聖なるキリスト教共同体を内部から腐敗させる異端と呼ぶようになった。両派とも自らこそが「真の教会」であると主張し、人々の魂の獲得とキリスト教共同体の再統合を目指して、互いに宗教改革と対抗宗教改革を推進することになる。その過程では両派の内部にも分裂が起こり、宗教的対立はさらに激化した。ルターの始めた宗教改革の衝撃によって、ヨーロッパ全域が信仰の大義を掲げた宗教戦争の時代に突入したのである。そしてその影響は、一八世紀まで及ぶことになる⁽¹⁾。

図1の絵は、宗教改革の歴史は宗教的対立の歴史と裏表一体なのであることをよく示している。三十年戦争前



図1 「ルターの『論題』提示前夜のシュヴァイニッツにおけるフリードリヒ賢公の夢」(1617年)
 ルターが実際に九五か条の論題をヴィッテンベルクの城教会の扉に掲示したのかどうかは定かでないが、百年祭ではこのような絵が出回った。百年祭によって、「掲示」は決定的な宗教改革始動のイメージになったといえよう。
 出典: Reimar Zeller, *Prediger des Evangeliums: Erben der Reformation im Spiegel der Kunst* (Regensburg, 1998), 64. Cf. Peter Marshall, *1517: Martin Luther and the Invention of the Reformation* (Oxford, 2017), ch. 3.

夜の一六一七年に、宗教改革百周年を記念してライプツィヒで印刷されたこの木版画には、「腐敗したローマ教会」に挑戦するルターの重要性をプロテスタントたちに再確認させる狙いがあった。木版画の左端に立つルターは巨大なペンを持ち、教会の扉に「贖宥状について (Vom Ablass)」と論題を書き始めている。そのペンは絵の中央に座する獅子「教皇レオ一〇世の寓意」の両耳を貫いて、後方に立つ教皇の三重冠を叩き落としている。上方には光り輝く三位一体「父と子と聖霊」が描かれ、そこから発せられる福音の光がルターの読む聖書に降り注がれている。ルターは三位一体をまっすぐに見つめている。つまりこの木版画は、ローマ・カトリック勢力との全面対決が予想された時期に、ルターの宗教改革とそれを引き継ぐプロテスタントの正統性を訴えかけているのである。

図1のわずか二年後に印刷された図2は、より直裁的に宗教改革と宗教的対立を結びつけた「戦意高揚画」と言えるだろう。この木



図2 「ボヘミア国王フリードリヒとその妃エリザベス・ステュアート」(1619年)

木版画の左半分に小さく、ボヘミアの宗教改革者ヤン・フスが持つ聖書に、ルターとカルヴァンが手をおく様子が描かれている。プロテスタントの伝承ではルターの生前から、ルターはフスの後継者と宣伝されていた。

出典：西川杉子「継続する宗教改革運動」(高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史 2』(山川出版社、2009年)、27頁。

版画は、一六一九年、ローマ・カトリックの神聖ローマ皇帝に挑戦して敢行されたプファルツ選帝侯フリードリヒ五世のボヘミア国王戴冠を、神の御業と讃えている。そしてフリードリヒの左手には、豊かな田園風景のなかに、聖書を手にしたボヘミアの宗教改革者ヤン・フスが、ルターとカルヴァンとともに立っている。これとは対照的に、木版画の右半分には、破滅に向かうローマ・カトリック教徒が描かれている。この絵は、ヨーロッパのプロテスタント陣営の指導者であるフリードリヒの治世下で、宗教改革こそが地上に黄金時代をもたらすという信仰の大義を具象化しているといえよう。

この二例は、信仰の大義が高く掲げられた時代だからそのプロパガンダであるが、これらに描かれた宗教対立の世界観は、その後の時代にも存続している。

このように一六世紀をこえて続いた宗教改革／宗教対立を検討するためには宗教改革研究の射程をより長く設定する必要があるだろう。実際、一九九〇年代以降の欧米の歴史学界では、宗教改革を数世紀に及ぶ射程で捉え直そうとする「長期の宗教改革運動」という見方が広まりつつある⁽²⁾。また近年では、一六一七年から現在まで百年ごとに行われてきた「宗教改革年祭」についての研究も注目されている⁽³⁾。これらの動向は、「啓蒙の世紀」ともよばれる一七世紀後半以降のヨーロッパ政治社会に関する研究においても、歴史を動かす動因としての宗教の見直しがすすんでいることと無縁ではないだろう⁽⁴⁾。本報告では、特にこの「啓蒙の世紀」に、ルターが始めた宗教改革が、どのように引き継がれたのかを特にイングラントを中心に検討する。

宗教的冷戦の時代へ

教科書的には宗教戦争の時代は、西・中央ヨーロッパにおいてはウエストファリアの和約（一六四八年）と共に終わったとされる。最後の宗教大戦とも呼ばれる三十二年戦争は苛烈で想像を絶する災禍をもたらした。ローマ・カトリック陣営もプロテスタント陣営も、その惨禍

に恐れをなし、ウエストファリアの和約が締結された際には、宗教的大義よりも国家理性が優先された。そしてウエストファリア以降は宗教的熱情を狂信とみなして、嫌悪する風潮が生まれてくる。ブリテン諸島の場合はヨーロッパ大陸よりやや遅れたが、一六六〇年に王政復古が行われ、いわゆる「ピューリタン革命」に決着が図られた。従来の歴史叙述では、概して、一七世紀後半には宗教は歴史の動因としての役目を終え、「啓蒙の世紀」、あるいは「理性の時代」が始まると理解されてきた。

しかし実際は、ローマ・カトリックとプロテスタントを両極とする宗教対立は終わっていない。一七世紀後半になっても些細な契機で紛争が勃発することはしばしばあった。例えばプロテスタントの国イングランドでは、一六六六年、首都ロンドンで起こった大火もローマ・カトリック教徒の犯行とされたし、一六七〇年代末にはタィタス・オートという詐欺師が捏造したローマ・カトリック教徒による国王チャールズ二世殺害の陰謀の存在を人々が信じ込み、無実の人々が次々と投獄され、そのうち二〇人以上が処刑されたという衝撃的な事件も起こっている。この事件は、チャールズ二世にとって王政復古以降の最大の政治危機、すなわち次期王位継承者と見な

されていた王弟ヨーク公ジェームズを、そのローマ・カトリック信仰のために王位継承から排斥しようとした「王位継承排除法案危機」にまで発展した。

異邦の宗教的同胞のために、国家が武力を用いたこともあった。一六七四年、ローマ・カトリックのハプスブルク家がハンガリーとトランシルヴァニア「現ルーマニアの西部」のプロテスタント聖職者「ルター派・カルヴァン派の両派」に大々的に改宗を強要した事件が起こった。そして収監された聖職者のうち最後まで抵抗した二〇数名を、ガレー船での漕役に服する囚人としてナポリのスペイン海軍基地に送ったのである。現代の研究者によると漕役刑の判決は、約五二パーセントの確率の死刑に等しい⁽⁵⁾。このような過酷な刑に対して、スイスのプロテスタント諸邦、ザクセン選帝侯をはじめとするドイツ地域のプロテスタント諸侯、イングランドのチャールズ二世、オランダ連邦議会等が抗議を行ったが、聞き入れられなかった。そこで一六七六年一月、オランダ連邦議会は、ミヒール・デ・ライテル提督率いる艦隊をナポリに派遣してプロテスタントのガレー船徒刑囚を解放させたのである（図3参照）。また、スウェーデン国王カール一二世は、北方戦争の際にシュレージエン「現

ポーランド・シロンスク地方」のプロテスタントの擁護を掲げており、一七〇七年の神聖ローマ皇帝ヨーゼフ二世との間に締結したアルトランシュテット条約において、特にルター派の権利を認めさせた（図4・5参照）。これらの事例が示すように、熱い宗教戦争の時代は終わっても、ウエストファリアの和約以降も宗教的冷戦が継続したのである。

一六八〇年代

「プロテスタンティズムの全般的危機」

宗教的冷戦が続く中で、プロテスタント勢力がもつとも危機感を強めたのが一六八〇年代であろう。ポーランドリトアニア、シュレージエン、ハンガリー、トランシルヴァニアは、一六世紀には破竹の勢いでプロテスタンティズムが普及した地域であったが、ローマ・カトリックの対抗宗教改革運動が成果をあげて、プロテスタントの教会数は激減していた。さらに、これらの地域のプロテスタント勢力の苦境が伝わる中で、フランス国王ルイ一四世が国内のユグノー「フランス改革派」に対する弾圧を激化したのである。

この時期にフランス国外に亡命したユグノーの数には



図3 ハンガリー・デブレツェン改革派神学校の前に立つガレー船徒刑囚の記念碑
1895年建立（筆者撮影）。ライテル提督と解放された徒刑囚の名が刻まれている。



図4 カール12世とルターを並べて描いたピラ (1707年)

この木版画では、カール12世はルターの宗教改革を継続する英雄としてみなされている。

出典: Deutsches Historisches Museum (ed), *Der Luther Effekt: 500 Jahre Protestantismus in der Welt* (München, 2017), 132-133.



図5 ウェストファリアの和約の取り決めで建設されたシュヴァイトニッツ
(現シフィドニツァ)のルター派教会堂

平和教会 (Friedenskirche) と呼ばれる。アルトランシュテット条約でさらに、塔や教会学校の建設が認められた (筆者撮影)。

諸説あるが、歴史家ロビン・グウィンは約二〇万と見積もっている⁽⁶⁾。苛烈な迫害の末に、一六八五年一〇月、ユグノーの諸権利を認めたナント王令が廃止された。留まった者たちはローマ・カトリックへの改宗を強いられたが、それを拒んだ者たちの多くは投獄やガレー船での漕役刑に処された。周辺諸邦にとっても、ルイ一四世の勢力拡張政策は脅威であった。八〇年代にはフランスはライン河畔のルター派帝国都市シュラスブルク「現ストラスブル」を併合し、カルヴァン派の勢力圏であったラインプファルツを焦土化した。また、フランスの影響下にあるサヴォイア公国のヴィットーリオ・アメデーオ二世に圧力をかけ、一六八六年、ピエモンテ地方の山岳地帯に住むプロテスタント・ヴァルド派を制圧している。約一万四千人いたとされるヴァルド派のうち、サヴォイアとフランスの連合軍によって虐殺されたものは約二千人、残りはほぼ全員、捕虜となり、八ヶ月の監禁



Copie exactement d'après un dessin Original fait en 1686.
Noy. en 1819. Deux pièces se joignant joint à cette ci.

図6 改宗の強制

1680年代に入って、ルイ14世は「ドラゴナード」という竜騎兵を用いた暴力的方法で、ユグノーに改宗を迫った。
出典: T. V. Murdoch and Museum of London (eds), *The Quiet Conquest: Huguenots, 1685 to 1985* (London, 1985), 29.

の後、改宗した者と子供の一部を除いて、領外追放となった。

プロテスタント諸邦の対応 イングランドの場合

一六八〇年代の「プロテスタンティズムの全般的危機」に、ブリテン諸島の三王国、オランダ連邦共和国、スイス盟約者団、ブランデンブルクなどプロテスタント諸邦は衝撃を受けた。ナント王令が廃止されると、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムはその約三週間後にポツダム勅令を発して、ルイ一四世を非難すると共に、宗教的同胞であるユグノーを領内に歓迎する旨を宣言している。選帝侯はまた、一六七〇年代からルイ一四世と対立してきたオランダ総督オラニエ公ウイレム三世と反フランス同盟を結ぶに至った。

これに対して、複雑な反応を示したのが、イングランドである。先に言及したように、王政復古期後半になると、イングランドではローマ・カトリシズムを邪教とみなす反法王教感情 (anti-papery) が高まり、ローマ・カトリック教徒である王弟ヨーク公ジェームズの王位継承排除を求める議会议案が提出されたほどであった。し

かし、一六八五年二月にチャールズ二世が没すると、王権神授説を信奉する多くの政治家や聖職者がヨーク公を国王ジェームズ二世として受け入れたのである。同年六月、チャールズ二世の庶子であるモンマス公ジェームズ・スコットが、プロテスタンティズムの擁護を掲げて反乱を起こしたが、十分な支持が得られず失敗に終わった。

しかし、同年内にも激化するユグノー迫害の知らせに、多くの人々は不安を募らせていった。フランスからのユグノー亡命者の流入も続き、人々を動揺させた。著名な文人ジョン・イーヴリンはナント王令が廃止された翌月の時点で次のように日記に書いている。

ひとつどうしても気にかかるのは、いまだ週二回ずつ発行されて、ヨーロッパで起こっていることを報道している官報に、一言も、フランスで起こっているすさまじい事柄について書かれていないのだ。それどころか、それに関係することはなにひとつ印刷されていない。大陸からの手紙や迫害された亡命者たちがいろいろ伝えてくるのに。この沈黙について考えたくはないが、プロテスタントたちの苦しみをわれわれが知らさ

れないのは、とてもおかしいことだ。よその国では、すでに彼らに助けをさしのべ、そうとうな額の義損金も集められているというのに。

フランスでの出来事は、多くのイングランドの人々が感じていた不安、すなわちローマ・カトリックの君主は遅かれ早かれ、プロテスタントの臣下を撲滅するという悪夢の現前であった。ジェームズ二世が、ユグノー迫害の知らせを検閲させたのも、それがブリテンに及ぼす影響を懸念したためであろう。ジェームズはまた、押し寄せるユグノー亡命者にも対処しなくてはならなかった。イングランドは一六世紀の宗教改革でプロテスタント国家になって以来、大陸のプロテスタントの大災に対しては、教会勅書（church brief）と呼ばれる大規模な義捐金募集——勅令によりイングランドとウェールズのすべての教区教会において義捐を募るというもの——を行うのが通例であったが、ユグノー亡命者の即時救済を願う多くの請願にもかかわらずジェームズは彼らのための教会勅書の発布を遅らせている。一六八六年一月、ベッドフォード伯爵家のレイディ・レイチェル・ラッセルは次のように友人に書き送っている。

ルターを引き継いで

気の毒なプロテスタントのための教会勅書には、水曜日もまた、王印をもらえなかった。期待されていたのに。大法官は、それが届けられた時、わきにのけておくように命じたそうです⁸。

ようやく勅書が発布されたのは一六八六年三月であり、しかも各教会で読み上げられるべき勅書の文面には検閲がかかっていた。苦難な状況にある「フランス人」が宗教迫害にあっていることは一切、認めていなかったのである。

しかし国王の慎重な態度に抗議するかのうちに、イングランドの人々は熱烈なユグノー支援の姿勢をみせている。首都では、ロンドン主教ヘンリ・コンプトンが次のような支援要請を聖職者たちに送っている。

彼ら「ユグノー難民」はまさに、あなた方のチャリティにふさわしい人々なのだ。否、彼らほど、あなた方の慈悲に値する存在はないだろう。彼らは命が惜しくて亡命してきたわけではない。命よりもはるかに尊い良心の為に、亡命してきたのだ。国外追放となった牧師を除いては、彼らは国外に逃げることも許されず、

亡命には想像を絶する困難と苦難を伴っていた。それゆえ、身も心もいずれ劣らぬ苦しみを抱えた彼らに對して、慰めを与え、救援を行うことは、最も尊い思いやりの行為である。

この教会勅書は、同年の夏には、四二、八八九ポンド集めることに成功している。これは、一六世紀から一八世紀後半に至るまで、数ある大陸のプロテスタントのための義捐金のなかで最高の額である。個人のレヴェエルも、教区レヴェエルでも、他の義捐金募集時よりも多く、献金がなされたことも確認されており、ユグノー迫害に對する人々の関心をよく表しているといえよう。

ユグノーのための教会勅書キャンペーンに尽力したコンプトン主教は、管轄下の聖職者たちに激しい反法王教的説教を行うことを許したためにジェームズ二世の不興をかい、八六年の夏にはロンドン主教職を停止させられた。しかし彼は、八八年に、名誉革命の引き金を引くことになる。同年六月、ジェームズの「庄政」に危惧を抱いた七人の聖俗貴族がオランダのオラニエ公ウイレム三世への「招請状」に署名をしたが、コンプトンはそのうちの一人であった。彼は、名誉革命後も一七一三年の死

去直前まで、大陸のプロテスタント諸教会との連帯運動に尽力している。

ブリテンの人々の

ヨーロッパ的なプロテスタント意識

ここで、当時のブリテンの人々がいかにヨーロッパ大陸のプロテスタント情勢に関心を抱いていたのか、スコットランドのグラスゴー近郊に住む長老教会牧師ロバート・ウッドロウの書簡を例にあげよう。これはウッドロウが、一七一七年、オランダの大学都市レイデンに赴く友人に宛てた質問のごく一部である。

：私はシュレージエンのプロテスタント諸教会の最新の情勢についてほとんど知りません。つまり、それらの教義、礼拝、規律、教会運営、そして学問の状況のことなどです。それらは数年前に、スウェーデン国王の働きかけで〔神聖ローマ帝国〕皇帝によって再建されたと言われました。九〇〇もの教会だと当時は言われました。それらについて何でもよいから知りたいのです。同様に、プファルツのプロテスタントたちの状況も〔知りたいのです〕。彼らはまったく破滅させ

られたのでしょうか、そうでなければどのような状況なのでしょう。サヴォイアと「ヴァルド派の」谷では事態はどうなっているのでしょうか。あそこでは「サヴォイア」公が「シチリア」国王になってから新たな迫害がおこったと聞いていますが。残っている彼ら「ヴァルド派」の人数を教えてください。それから、あなたがわかる限りの彼らの司法や礼拝についても。それから、彼らが迫害の中で、衰退しているのか、あるいは強力になっているのかも。レイデンにはしばしばポーランド人「学生」がいますが、あなたは彼らからポーランドの状況の知らせを得ることでしょう。あの地に残るプロテスタントの数はどうですか。彼らの迫害の状況は。かつて三千の教会のあった王国で今、公けの礼拝集会が行われているのでしょうか。かの地のソツツイーニ主義はどのような様子でしょうか。そして、彼らのヨーロッパでの布教の試みは。今ポーランドが被っている混乱のなかで、学問と宗教はどのような状態なのでしょう。あなたはひょっとしてボヘミア人、ハンガリー人、トランシルヴァニア人の学生から、それぞれのプロテスタント教会について詳しい説明を得られるかもしれませんね。私は、特別になにか知る必要

ルターを引き継いで

があるわけではありませんが、プロテスタントの数とか、牧師や司法、宗教の状況、学問についてとか、なにも知らないのです。かの地での帝国軍の成功は教会にいかなる影響を及ぼすでしょう。「対オスマン戦役での神聖ローマ帝国軍司令官」プリンツ・オイゲンは学問や自由に、従って宗教についても、理解があつて、「ローマ・カトリックの」僧侶やイエズス会士には左右されないお方と思われていました¹⁰⁾：

ウッドロウは地方に住む一牧師で、特に政治や文化の面で重要な役割を果たしたわけではない。しかしこの引用部分からも、彼が大陸のプロテスタントに対していかに深い関心を抱いていたかが伝わってくるであろう。ウッドロウは膨大な書簡を残しているが、その多くには、ポーランド・リトアニアやトランシルヴァニアのプロテスタント教会の情勢、ユグノーのガレー船徒刑囚の安否、フランス・セヴェンヌ地方のカミザール「ユグノーの反乱者」たちの動向、プファルツ人たちの状況について、事細かな質問や彼自身のコメントを書いている。ウッドロウはスコットランド高地地方におけるローマ・カトリックの勢力拡大も憂慮していたが、彼のプロテスタント

意識はスコットランドのみの内向きのもではなく、国境を越えた汎ヨーロッパ的プロテスタント共同体のメンバーとしての自覚と重なっていたのである。

ウッドロウの同時代人で、名誉革命直後にイングランドに亡命してきたユグノー、アベル・ボワイエは、渡英直後は困窮を極めていたが、一七〇三年からイングランド内外の政治情勢をまとめて年鑑『アン女王の治世史』〔一七二一年より、月刊誌『英国政治事情』も出版〕として出版するようになった。ボワイエの時事報道は、ユグノー亡命者の持つ情報網を活用して、国内報道だけでなく、プロテスタント勢力の動向も含めた大陸の宗教・政治情勢を詳細に伝えていたが、まさにウッドロウのように大陸情勢に気を揉む人々の関心を捉えたのだろう。時事報道で成功したボワイエは、イングランドに帰化し、一財産を築いている。

理性の時代の宗教改革運動

このように「理性の時代」といわれる時期に至っても、プロテスタントのあいだではローマ・カトリックに對する危機意識あり、プロテスタント共同体の防衛がさかんに説かれた。この危機意識の中からプロテスタント

国際主義とでもいうべきプロテスタント勢力の連帯の動きがヨーロッパ各地で高まることになる。この連帯運動は、同時代人からは、ローマ・カトリックの脅威に對抗する動きとして、またルターやカルヴァンの運動を引き継ぐものとして、まさに「宗教改革」として見なされていた。この宗教改革の中心的担い手としては、ブランドンブルク領ザーレ河畔のハレにおけるアウグスト・ヘルマン・フランケ指導の敬虔主義、ジュネーヴやスイスのプロテスタント諸邦における改革運動、オランダ改革派教会に組み込まれた亡命ユグノーのネットワーク、そしてイングランドでは聖俗エリートが集まって結成したキリスト教知識普及協会 (Society for Promoting Christian Knowledge 略称SPCK、グレゴリウス暦一六九九年三月創設) 等があげられる。彼らはプロテスタント諸勢力の「連合、支援、救助」の必要性を確認しあい、運動を拡大していった。

この多中心的な連帯運動の特徴の一つは、邪教≡王教につけこまれないように民衆を啓蒙する必要を主張しながらも、宗教的熱情が災禍を増大させた三十年戦争や「ピューリタン革命」の反省から、狂信や迫害を忌み嫌い、教育や道德の社会的実践に重点を置いたことである。



図7 ヴァルド派教会堂シャバス

1687年にピエモンテの谷を追われたヴァルド派は、1689年、ルイ14世が名誉革命への対応に追われている隙をついて、谷への帰還を果たした。いわゆる「栄光の帰還」である。谷の教会堂はすべて破壊されていたが、ジュネーヴの援助で1701年から再建が図られた。シャバスは帰還後、再建された最初の教会堂である。1708年より、オックスフォードで学んだヴァルド派シブリアン・アッピアがシャバスの教区牧師となった。シブリアンは1705年にSPCKの通信会員になっている（筆者撮影）。

彼らの主な活動は、宗教冊子の出版・配布、聖書の各国語訳、教区教会付属図書館の充実、慈善学校の支援、囚人の教化促進などである。これらの活動を通して穏やかに民衆を良きプロテスタントに教育していくこと、つまり、モラルに基づく宗教改革を重視したであった。この運動の国家を超えたネットワークの広がりも注目に価するだろう。ロンドンに拠点を置くSPCKの通信相手の所在は、ヨーロッパ内では、東はモスクワやトランシルヴァニア、西はアイルランド、北はリトアニアやクールラント「現ラトヴィア」、南はイタリア地域にまで広がっていた。そしてこの通信網を通して得た重要情報は、すぐに連携する他国のプロテスタントの指導者に伝えられたのである。SPCKの良きパートナーであったハレ敬虔主義のフランケは、約五千人の文通相手を持ち、そのうち三〇〇から四〇〇人とは頻繁に情報交換をしていた。¹²⁾同じくSPCKの会員であったベルリン在住のダニエル・エルンスト・ヤブロンスキ「ヤン・アモ



図8 アングローニュ谷のヴァルド派教会

ペリッチェ渓谷地帯のなかでもとりわけ奥深いアングローニュ谷。オリヴェタンことビエール・ロベールによる聖書のフランス語訳（ヌシャテル聖書）はこの地でなされた（筆者撮影）。

ス・コメニウスの孫」の残した書簡も莫大なのであり、近年研究プロジェクトが立ち上げられている。¹³⁾

この情報網を活かして、SPCKやハレ敬虔主義者は、迫害されたプロテスタントの救援活動も行なった。その中には、フランス海軍のガレー船につながれたプロテスタントの情報を集め、彼らに資金を秘密裏に手配をするという、諜報部員まがいの仕事もあった。また一七三一年、ザルツブルク大司教領から二万人を超えるプロテスタントが追放された際には、彼らが新たな移住先に到達するまでの世話を、街道筋のプロテスタントと連絡を取り合いながら行なった。さらに、SPCKは困窮したプロテスタント勢力のために、イングランド国教会や政府に働きかけて、教会勸書による義捐金募集にも関わるようになっていた。その対象になった集団としては、ユグノー難民、ヴァルド派、オランジョワ公国プロテスタント難民、アルメニア教会「東方正教会」、クールランツの教会、ライン・プファルツのプロテスタント難民、トラン

シルヴァニアのナジエニエド「現アイウド」の改革派学校^{コレギウム}、ポーランド・レシユノのボヘミア兄弟団、リトアニアの改革派教会、コペンハーゲンの改革派教会、リトアニア・ジェマイティア地方の都市ケダイニイのスコットランド系市民等が挙げられる。

当然、SPCKの教会勅書に対する影響力については、ヨーロッパ大陸のプロテスタント諸勢力の間でも評判になった。一七〇〇年代後半ともなると迫害や貧窮に苦しむプロテスタントが、次々と、教会勅書による義捐金を目的にSPCKに請願を行うようになった。一七一四年にはドイツ北部に住むSPCK通信会員ジョン・ホーリンクという人物が、次のような書簡をロンドンのSPCK本部に送ってきている。

「ホーリンクによると」ヴォルガスト（バルト海沿岸ポメルンの都市）の主席司祭を務めるフォン・プラーテン神学博士は、近隣やドイツの他の地域からヴォルガストの教会再建のために情報を集めている。その教会は、町全体とともにモスクワ人によって灰燼に帰したのだ。フォン・プラーテン博士は、ホーリンクに教会再建の目的で慈善金を募るためにイングランド

まで行く価値があるかどうか、特にイングランドまで行けば協会（SPCK）が彼を支持してくれるかどうか、イングランドにおける彼（ホーリンク）の友人たち¹⁴に問い合わせるよう依頼したそうだ。ホーリンクは、彼の手紙といっしょに、その哀れな人びとの悲惨な状況を記した高ドイツ語の報告を同封している。その内容をチェンバレン氏（SPCKの中核メンバー）から会に伝えて欲しいとのことである。

「イングランドまで行く価値があるか」—— 実際にはSPCKに陳情するために、ロンドンまで旅をして大陸のプロテスタントは少なからずいた。上述のトラシルヴァニアのナジエニエドの改革派学校^{コレギウム}の場合、まずベルリンとスイス諸邦に使者を送り、SPCKも含めたイングランドの情報とプロイセン国王フリードリヒ一世をはじめとする有力者の推薦状を獲得し、公式の代表をSPCKに派遣してきた。旅の途上では、オランダ改革派教会も訪ね、そこからも推薦状を得ている。幸運にも、ナジエニエドの場合は、SPCKの協力を得て、イングランドとウェールズのすべての教区教会において、義捐金を集めることができた。



図9 ナジエニェドの町

写真中央の建物が改革派のコレギウム。トランシルヴァニア公ベトレン・ガボールによって、1622年に創立された。コレギウムは、かつてはナジエニェドの領主でもあった。SPCKの助けを得て、教会勅書によって集められた義捐金は、1720年～43年にかけて学舎再建に用いられた。その残りは、ロンドンのユグノー銀行家によって運用されていたが、1849年、再び破壊された学舎の再建に用いるのにちょうど十分な額であった（筆者撮影）。Cf 西川杉子「森の彼方のコレギウム」『創文』、490（2006）。



図10 ナジエニェド改革派学校で作成中のジョージ1世像

20世紀の共産党政権の下ルーマニアでは、ハンガリー系の学校は抑圧されていた。筆者が訪ねた際には、教会勅書による学校とイギリス王室の歴史的結びつきをアピールすることが計画されていた（2004年筆者撮影）。



図11 コペンハーゲンの改革派教会堂

1728年コペンハーゲンの大火で都市の半分が焼失した。都市のフランス系・ドイツ系改革派は国外のプロテスタントに援助を求めた。イングランドでは1729年に教会再建のために教会勅書を発布している（筆者撮影）。

しかし、一七一〇年代後半にイングランドまで旅をしてきたリトアニア改革派教会の代表ボグスラフ・コピエヴィッチはそれほど恵まれなかった。ペラルーシやバルト海沿岸諸都市の推薦状を得てロンドンまで旅してきたものの、大規模な義捐金募集は認められなかったのである。帰途につく旅費さえもないコピエヴィッチを見かねて、SPCKやカンタベリ大主教ウィリアム・ウエイク「彼自身がSPCKのメンバー」が仲介に入り、コピエヴィッチはアイルランドで義捐金募集を試みたが、これはダブリン大主教ウィリアム・キングの怒りを買うことになった。「アイルランドの貧者のための蓄えを外国からやってきた乞食に与えよとは全く理解できない」とキングは抗議している。結局、一七二四年、SPCKのメンバーでアーマー大主教となったヒュー・ボールターがダブリンに到着するまで、コピエヴィッチはダブリンの人々の善意にすがって逗留していた。ボールターが資金を手配したおかげで、コピエヴィッチは一七二七年にリトアニアに戻る事ができたが、手ぶらで帰国した彼をリトアニア改革教会は糾弾している。



図12 ケダイニの改革派教会堂

プロテスタント大貴族ラドヴィラ（ポーランド名ラジヴィウ）家の支配のもとスコットランド系商人がケダイニの実権を握っていた。1730年、資金援助を求めてきた彼らのために、SPCKは独自で義捐金募集を行った。この教会堂は1631年から53年にかけて建設された。ソヴィエト時代は体育館となっていた（筆者撮影）。

一七一〇年代になると、SPCKとハレ敬虔主義者は共同で、ロシア、東地中海地方^{レヴァント}そしてインドへの布教を開始した。特にインド布教については、敬虔主義の教育を受けたデンマーク国王フレデリク四世の賛同を得て、デンマーク領インド植民地トランケバル「現タランガンバードイ」とイングランド東インド会社領マドラス「現チェンナイ」にハレのプロテスタント宣教師「ルター派」を派遣し、さらにハレの宣教師による新約聖書のタミル語訳をSPCKが資金援助するというものであった。同じプロテスタントとはいえ異なる教派が布教活動を行うことについて、インドでは反対意見や外部からの圧力もあったのだが、敬虔主義の指導者フランケは、SPCKに次のように書き送っている。

後世の人々は、キリスト教布教という共通の大義のために、いかに一つの民族が他の民族を助けることが出来るのかを、我々の事業から学ぶことでしょう。そこでは、ドイツ人がデンマーク人を助け、イングランド人が両者を助けてい



図13 ケダイニに残るスコットランド商人の家

SPCK から援助を得たストックランド商人の事業は火事によって破綻した。筆者が初めてケダイニを訪問した1998年には、SPCK との関係は忘れ去られていた（筆者撮影）。

るのです：マラバーの未開人をキリスト教に改宗させる企ては、普遍的な事業です。慈悲と公共の精神を持ったすべてのキリスト教徒によって、推進されるにふさわしいものです。⁽¹⁶⁾

SPCK の側も、このフランケの考えに共感していた。インド布教事業について、SPCK の書記ヘンリ・ニューマンはライブツイヒの通信会員に次のように伝えている。

キリスト教徒のどの教派においても頑迷な人がいて困らされるものですが、しかし神の配慮は明らかであります。ローマの輩を除いてすべての集団において、穏健さと中庸の精神の味方はおります。そして、幾つかの意見の違いも忍耐を持って受けとめ、これまでのところ、相互理解を深めて：完全なる宗教改革に向けて努力し、よりいっそう全体的な調和をめざしています。⁽¹⁶⁾

これはこの時代の宗教改革の精神をよく表し

た言葉といえよう。

歴史学では、ルターの宗教改革以降の近世史は、往々にして、主権国家体制形成、国民国家形成を中心にして、ストーリーが作られがちである。しかし、一七世紀後半・一八世紀の宗教改革運動を検討する時、そこには一國史の枠組みでは説明しきれない政治的・宗教的・社会的変動があったことが確認できる。その動きは汎ヨーロッパ規模の連帯運動を生み出し、宗教的少数派を支え、ヨーロッパを超えた地域の布教運動にまで結びついた。「理性の時代」を考察するにあたって、歴史の推進力としての宗教を再評価することが必要であろう。

(二〇一七年九月脱稿)

本稿では、統計的数値、図版や引用の出典、また筆者の博士論文で扱っていないものの典拠のみ、註にあげた。註は付していないが、教会勅書とSPCKに関する部分は、筆者の博士論文 *English Attitudes toward Continental Protestants with Particular Reference to Church Briefs c.1680-1740* (Ph. D. thesis, University of London, 1998) を参照したものである。

以下には、それ以外の参考文献をあげる。

- 西川杉子「継続する宗教改革運動」『プロテスタントのヨーロッパ——啓蒙主義と信仰復興』（高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史 2』山川出版社、二〇〇九年）
- 西川杉子「プロテスタント・ネットワークのなかのイギリス」（近藤和彦編『長い一八世紀のイギリス——その政治社会』山川出版社、二〇〇二年）
- 西川杉子『ヴァルド派の谷へ——近代ヨーロッパを生きぬいた異端者たち』（山川出版社、二〇〇二年）
- Sugiko Nishikawa, "English Relief Activities for Continental Protestants in the Eighteenth Century: Perpetuating religious networks in the age of reason", in Vivienne Lammine (ed), *Huguenot Networks, 1550-1750: The Impact of a Minority in Protestant Europe* (Routledge, 2017).
- Sugiko Nishikawa, "Ending a Religious Cold War: Confessional Trans-State Networks and the Peace of Utrecht," in Inken Schmidt-Voges and Ana Crespo Solana (eds), *New Worlds? Transformations in the Culture of International Relations Around the Peace of Utrecht* (Routledge, 2017).
- Sugiko Nishikawa, "Protestant Propaganda in a Cold War of Religion: From the Hartlib Circle to the Society for Promoting Christian Knowledge", *Lithuanian Historical Studies*, 16 (2012).
- Sugiko Nishikawa, "Die Fronten im Blick: Daniel Ernst Jablonski und die englische Unterstützung kontinentaler Protestanten," in Joachim Bahlke and Werner Korthase

- (eds), *Daniel Ernst Jablonski: Religion, Wissenschaft und Politik um 1700* (Wiesbaden, 2008).
- Sugiko Nishikawa, "The SPCK in Defence of Protestant Minorities in Early Eighteenth-Century Europe," *The Journal of Ecclesiastical History*, vol. 56, 2005, pp. 730-748.

註

- (1) 西川杉子「継続する宗教改革運動」「プロテスタントのヨーロッパ——啓蒙主義と信仰復興」(高柳俊一・松本宣郎編『キリスト教の歴史 2』山川出版社、二〇〇九年)。
- (2) Nicholas Tyacke, ed. *England's Long Reformation 1500-1800* (London, 1998).
- (3) T. A. Howard, *Remembering the Reformation: An Inquiry into the Meanings of Protestantism* (Oxford, 2016); Peter Marshall, 1517: *Martin Luther and the Invention of the Reformation* (Oxford, 2017).
- (4) 近世・近代史における宗教の役割の再評価につづけば、西川杉子「教会」(近藤和彦編『イギリス史研究入門』(山川出版社、二〇一〇年)。
- (5) シャン・メルテュー『ガレー船徒刑囚の回想』(木崎喜代治訳、岩波文庫、一九九六年)、四六一―四六三頁。
- (6) Robin Gwyryn, *Huguenot Heritage: The history and contribution of the Huguenots in Britain, Second Revised Edition* (Brighton, 2001), 31.
- (7) John Evelyn, *The Diary of John Evelyn*, ed E. S. de

ルターを引き継いで

- Beer, 6 vols (Oxford, 1955) IV, 487.
- (8) Rachel Russell, *Letters of Lady Rachel Russell*, ed. anon, 6th edn (London, 1801), 87.
- (9) Bodleian Library, Oxford, Tanner MSS 30, fol. 10.
- (10) *The Correspondence of the Rev. Robert Wodrow*, ed. Thomas McCrie, 3 vols (Edinburgh, 1842), II, 304-305.
- (11) フォーノン・グロウヴ、西川杉子「リベラルなヨーロッパ革命体制の防衛——マベル・フォーノン「アン女王の治世史」を中心として」『西洋史学』一六三(一九九一年)を参照。
- (12) W. R. Ward, *The Protestant evangelical awakening* (Cambridge, 1992), 2.
- (13) Cf. Jabloniana: Quellen und Forschungen zur europäischen Kulturgeschichte der Frühen Neuzeit (Harrassowitz Verlag, Wiesbaden); Joachim Bahlcke, Bogusław Dybas, Hartmut Rudolph, Rudolf Vierhaus (eds), *Brückenschläge: Daniel Ernst Jablonski im Europa der Frühaufklärung* (Döbel, 2010); SPCK Archives, Abstract Letters, Received no. 3853.
- (14) Sugiko Nishikawa, "Across the Continent: the Protestant network between the Society for Promoting Knowledge and Kedaniai", in Zigmantas Kiaupa et al (eds), *Kultūry Santrios* (Diemedžio leidykla, 2000).
- (15) SPCK, Abstract Letters, Received CRI/4.
- (16) SPCK, Special Letters CS3/2.